

【1】高等部の基本的な考え方と教育課程の編成について

高等部の教育目標は、これまで「青年期の発達的特徴」を踏まえて、『すすんで学ぶ気力にあふれた子』の育成』としてきた。

これは、青年期においてはこれまでの生活経験の蓄積に加え、青年期の発達的特徴である心身の安定と人格形成上のさらなる飛躍が期待されることに着目したものである。

「青年期の発達的特徴」を要約すれば次のような事項が挙げられる。

- (1) 急激な身体的発達の伸びと第二次性徴の発現 — 社会に結びついた大人の素材での教育活動が可能となる。
- (2) 表象、ことば、道具などの操作力等や認知能力の高まりが見られる — 自己調整力の育ちに伴い学習活動への集中、持続力の高まりが期待できる。また、これは研究課題である「コミュニケーションの力を育む」上で、大きな成長と能力獲得の要因となる。
- (3) 自己確認、自己評価の力が育ち、関心のある活動に意欲的に取り組もうとする — 社会への関心が広がり、自己内対話と共に周囲と自己との関わりを理解し、興味の対象の広がりが期待できる。

このような点に着目し、より主体的に（すすんで）、また意欲的に（気力にあふれた）活動する機会を保障することに創意をこらしてきた。それは、社会参加を目前とする高等部の生徒にとって、障害を前向きに捉えながら、乗り越えるべき課題であると考えたからである。

また、障害認識（できない部分）についても、周囲の「支援」を受動的に受けとめるのではなく、支援者に能動的、主体的に働きかけることを重視して取り組んできた。

以上のような考え方に基づいて教育課程を編成し、特にコミュニケーションの力を育むという点で言語、動作を含む自己表現力や相手の表現（指示など）をしっかりと受けとめ（理解し）対応できる力を高めると共に、自己客観視をめざした自己内対話の力を高めることをねらった学習活動に取り組んだ。

なお、これらの教育目標に到達するための具体的な指導の重点は、従来と同様に次の事項である。

- (1) 生活年齢を意識した指導 — 障害だけに目を向けるのではなく、高校生として一人ひとりの人格を尊重した指導を行う。
- (2) 待つ姿勢を大切にした指導 — 生徒の思いをじっくりと引き出し、共に学習しようとする姿勢で指導を行う。
- (3) 生徒が主役となる指導 — 生徒の主体性や主張を十分に引き出し、学習活動の中で一人ひとりの存在感が持てるような指導を配慮する。
- (4) より具体的な内容を通しての指導 — 学習内容を一人ひとりの生徒の生活の中で具体化し行動化できるような学習形態を工夫して指導する。
- (5) 段階を踏んだ継続的な指導 — 生活上の課題についてスモールステップを踏みながら、その解決方法が獲得できるような学習を組み立て、継続的に指導する。
- (6) 見通しを持たせる指導 — 全ての教科・領域の中で、目的意識を持って学習に取り組む姿勢を大

切にした指導を行う。

(7) 障害を自覚させつつも、その克服に積極的に立ち向かうことのできる指導 — 生徒自身が障害を前向きに認識した上で、その改善が可能であることに気づき、学習に取り組めるよう指導する。

なお、研究課題とした「コミュニケーションの力を育む」との関わりについては、高等部の目標とする社会的自立を視野に入れ、「感情や身体発達と知的精神機能のアンバランス」という障害認識を前提とした上で、より豊かな社会生活を保障する条件の一つが「コミュニケーションの力」であると考へ教育課程編成の上でも配慮してきた。

特に、コミュニケーションの力は生徒たちが主体的に自らのネットワークづくりに参加しようとする時に重要な条件の一つであると考え、学習活動の中で多様に組織することに努めてきた。

〔1〕高等部の教育課程編成上の特徴と留意点

高等部の教育課程を規定する週時表は、右の表の通りである。前述した「障害認識をした上での社会的自立」をめざし、「積極的に学び、気力にあふれる子の育成」を教育目標に、生活一般、課題学習、職業科を中心とした教育課程を編成してきた。

今年度は、従来からの「生活年齢を意識した指導」を重視する方針を一層深化させるため、教科・領域間の単元・題材の関連を考えた配置に創意を加え、生活一般、課題学習の学年単位での取り組みに工夫をこらしてきた。

生活一般は、「生活者としての力をつける」、すなわち、生活につながる経験や体験を学習することにより、具体的・実践的に問題解決に取り組ませることをねらっており、特に実体験を大切にできる校外学習が3時間連続して取り組めるよう設定してきた。

課題学習は、主として生活一般でねらう「生活に必要な実践力」を支え、定着していくために必要な「基礎的な知識」を学習する場であると考え、生活一般と関連づけた単元や題材を取り上げてきた。指導形態としては、生徒の認識の特性や発達段階に応じて、2～3のグループに分け、学級（学年）単位に指導してきた。

労働を通しての社会参加にあたって、「働く」ことに関する課題の多くは、「職業教育」の中で実践的に取り組んできた。週6単位時間の「職業科」は木工、印刷、陶芸、受注（主として紙工）の4コースで、生徒一人ひとりの課題に応じてコースを選定した。その他に、全員で取り組む「共同作業」（農耕、園芸、軽作業）の時間が2単位時間ある。この「職業科」の取り組みについては、

表1 高等部 週時表

曜日	月	火	水	木	金	土
8:40	登校・朝の生活					
9:05	ホーム ルーム	朝の活動（朝の運動・課題別裁別）				生活一般
9:45	生活一般	職業	生活一般	生活一般	職業	生活一般
10:30	長休					
10:45	課題学習	職業	生活一般	課題学習	職業	生活一般
11:25	課題学習	職業	生活一般	課題学習	職業	着替え ホームルーム
12:10	給食					下校
12:45	洗面・休憩					
13:10	掃除		掃除			
13:30	音A/ 体B	クラブ	生活一般 （専任）	共同作業	音B/ 体A	
14:10			着替え ホームルーム			
14:30	音B/ 体A	委員会		共同作業	音A/ 体B	
14:55	着替え			着替え		
15:10	ホームルーム			ホームルーム		
15:30	下校			下校		



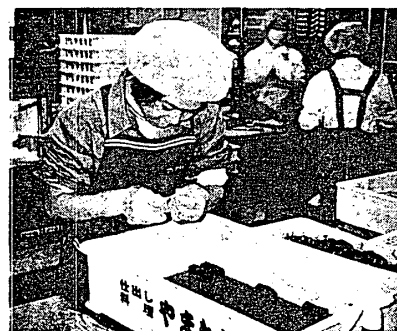
校内職業実習から

作業態度の育成はもとより、生徒が主体的に集中力を持って「働く」姿勢を重視している。職業教育を重視する立場から、集中的に長時間作業に取り組み、働くリズムの定着を図るために校内職業実習と現場実習を次のように計画し、行っている。

(校内職業実習と現場実習の計画)

		ね ら い	作 業 内 容 等	対 象
5月	校内職業実習	現場実習の事前	紙工、ボールペンの組み立て	全学年
6月	現 場 実 習		(3週間)	3年
10月	校内職業実習	現場実習の事前	電気部品の組み立て	全学年
	現 場 実 習		(2週間)	全学年
11月	校内職業実習	共同作業の発展	年賀状印刷	全学年
2月	校内職業実習	進級、卒業へのまとめ	軽作業	全学年

特にこれらの実習にあたっては、否応なしに労働的教材の前に生徒が立つことで、苦手とする教材をもクリアし、働くことへの意欲をさらに引き出すことができると考える。それだけに、自分の行っている作業の目的を意識できない生徒にとっても、また進路を意識して実際の社会での労働を見通す力をつけてきている生徒にとっても、各自の課題を認識できる重要な学習の場と考えることができる。



現場実習から

〔2〕 研究課題としての「コミュニケーションの力を育てる」ための取り組み

全教科・領域の中での「コミュニケーションの力を育てる」という視点における指導の基本的な考え方は、次の通りである。

- ① 生徒の表現を可能な限り受容し、個性を尊重する立場に立つ。
- ② 自分の思いを語り、他者への思いを理解するなど、豊かな人間関係の場をつくることに努める。
- ③ 言語の障害のある生徒のことば以外の表現手段についても互いに尊重し合う雰囲気をつくる。
- ④ 誠意が伝わる表現を大切にする。

社会参加における課題としては、「豊かに共感しながら、人間的な意思の交流をできる」ということが求められている。従って、学校においても、労働を教材として、豊かに自分の思いを伝えたり、相手の思いを正しく受けとめて行動できるような指導が必要となる。

これらは、日常の学校生活の中での生徒同士の関係や生徒と教師間のやりとりからつくり出されるものであり、この過程を経て、一人ひとりの生徒のコミュニケーションの力として育っていくものだと考える。それ故に、全教科・領域における「授業」を豊かに創造することがコミュニケーションの力を育てる基盤となると考え、授業づくりに取り組んできた。

周囲のあらゆる人と豊かに交わるためにも、社会参加を控えた高等部でのコミュニケーションの育ちは、就労をはじめとする社会参加にあたっての重要な要件となると考えている。